Hosei University Repository

法政大学大学院デザイン工学研究科紀要　Vol.2（2013 年 3 月）　法政大学

東京ホテル建築史 1868 年～1939 年
ーその意味と多様性

THE HISTORY OF THE TOKYO HOTEL ARCHITECTURE 1869～1939
-THE MEAN AND DIVERSITY

中村敏宏
Toshihiro NAKAMURA
主査　高村雅彦　　副査　陣内秀信・渡辺真理

法政大学大学院デザイン工学研究科建築学専攻修士課程

This thesis draws varieties and diachronic transformations that hotel architectures in Tokyo had before the war, based on five keywords, "acceptance of foreigners in enclave", "symbol of modernization", "renaissance of Edo Meisho (notable sights in the Edo era)", "mature of civic life", "innovation and new style" applied to the development concepts in which the five social backgrounds were heavily involved.

***Key Words** : Hotel, Tokyo, The modern era*

１．はじめに

（１）研究目的

本研究は、戦前における東京のホテルをいくつか取り上げ、各ホテルが誕生した社会的背景や開発思想を基に、周辺街区との関係性や建築様式の選択、平面・立面構成などを明らかにすることによって、ホテルが東京の中で担っていた都市機能としての位置づけを与え、時間軸を通した考察を加える事によって、戦前の東京ホテル建築がいかに多様性を持って変容してきたかを描くことを目的とする。

（２）研究方法

ホテルの開発思想に大きく関わったとされる５つの社会背景を取り上げ、それに伴う開発思想を「居留地」、「近代化」、「江戸名所の再興」、「市民生活」、「技術革新」の５つに置き換え、オーナー達がそれらのキーワードの基にホテル経営をどのように考え、自分たちの開発思想を、ホテル建築を通して表現していったのかを明らかにしていく事で、戦前までの東京におけるホテル建築が持っていた通時的な変容と多様性について描いていく。

２．戦前の東京ホテルの定義

（１）戦前の法制度上におけるホテル

江戸幕府は１８６７年１１月２６日、諸外国の駐日公使と「外国人江戸ニ居留スル取極」を締結させて以降、ホテルについて法制度的な規定がない状態が続き、東京においては明治２０年１０月に制定された『宿屋營業取締規則』によってようやく法制度の中にホテルが登場する事となる。『宿屋營業取締規則』の中では、総体としての「宿屋營業」の下に、「旅人宿」、「下宿」、「木賃宿」が分類され、既往研究である『旅館營業ト重要法規ノ研究』（犬丸徹三著、1921）によると、ホテルが旅館と同じ枠組みの「旅人宿」に該当していたと指摘されている。この『宿屋營業取締規則』は、昭和６年に改正され分類の呼称が改称されるも内容に関しては大きな変更点は無く、この状態が現行法規制度の基となる『旅館業法』が制定される昭和２３年まで継続される。つまり戦前の法制度上において、旅館とホテルは区別されていなかったのだ。

『宿屋營業取締規則』では、宿泊業と料理業の兼業は禁止されていたのに対して、様々な史料からホテルは宿泊客以外にも料理を提供していることが記載されており、法規と現状とでは矛盾が生じていたと言える。この為、「ホテルと稱する以上一定の資格あるものに限定せざる限り、國際旅客をして、宿泊後失望せしむる恐れある」等の法規への疑問に関する意見が数多く持ち上がっていた。[1]

（２）本論文におけるホテルの定義

前項のような意見を受けて、明治４２年に全国の主要ホテルによって組織された日本ホテル協会が発足された。そして彼らの長期にわたる活動の果て、昭和５年４月２４日、鉄道省に外局国際観光局が創設されるに伴って警視署長宛に「ホテル及飲食店兼業ニ關スル件」が提出され認可された。これ以降、ホテルの構造、客室の最小面

Hosei University Repository

積、客室数、廊下幅員、食堂の形式に規定が設けられ、その規定を超えたものだけが「洋式旅館（ホテル）」と認められ宿泊客以外への料理業が許可されるようになり、ホテルという概念が初めて法制度上で認められる事となった。[2]

しかし外局国際観光局が、料理店の兼業のみに言及している点に不満を覚えた日本ホテル協会は、同年１１月２６日にホテル事業改善に関する請願書を提出した。その請願書の中で、「ホテル營業人ヘ同一屋場内ニ於テ料理店、演技場、理髪店、治療設備ヲ有スル浴場、球突場、舞踏場及其ノ他ノ娯楽場ヲ兼營シ得ルモノトスルコト」[3]とあり、料理業以外の兼業を法規上で認める事を出願した。残念ながらこれらの要望は受け入れられる事はなかったが、ホテル経営者たちは、ホテルの本質は宿泊業に限らず、様々な用途を兼ね備えた娯楽の複合施設であると捉えていたことがわかる。

戦前のホテルという概念は、法制上の規定と経営者たちの捉え方や実状には大きな溝があったという事がわかった。本論文では経営者たちの開発思想やホテルの実状が大きく関係しており、経営者や利用客がどのようにホテルを取り扱っていたのかが重要な要素となる。そのため、日本ホテル協会が考えるホテルの定義「洋風の設備や様式を主とした、宿泊業以外の料理業・小売業・理髪店など様々な娯楽施設を兼ね備えた総合的な宿泊施設」を本論文におけるホテルの定義として考察していく。

３．居留地の外国人受け入れホテル

（１）東京開市と居留地

１８６９年（明治元年）１月１日、年号は慶応から明治へと変わり、江戸も東京へと改称され、東京の開市と共に築地外国人居留地が設けられた。「開市場」では「開港場」と違い、外国人が商売をしている間のみの一時的な滞在のみ認められており[4]、外国人にとっては一時宿泊先のホテルが重要だった。

築地居留地は土地を買う事で新築を建てられる純居留地と、既存の建物を借り受ける相対借り地域で構成されており、この敷地の違いによってホテルの構成も影響を受けていた。

（２）築地ホテル館

表１　築地ホテル館概要表

1. 築地ホテル館			
開業年	閉業年	所在地	土地概要
1868年（明治元年）	1871年（明治4年） 休業、その後焼失	築地南小田原町	相対借り地域
客室数	建築概要	設計者	オーナー
103	木造2階（塔4階）	基本設計：ブリジェンス 詳細設計：清水喜助	清水喜助

東京で初めて完成したホテルが、ブリジェンスと清水喜助の合作である築地ホテル館である。ブリジェンスが基本設計を行ったのだが、喜助が施主兼施工主となっていた為、所々に和風趣味の要素が見られるこのホテルは、居留地と一体開発された[5]。築地ホテル館と居留地のどちらも、外国人の受け入れと潤滑な貿易という開発思想を共有していた為、図１の様に波止場とホテル敷地内の取引所が幅の広い道路で結ばれる等、周辺環境との結びつきが強く表れている。

（３）居留地における外国人ホテルの画一化

築地居留地では、その後も外国人オーナーによって建てられるホテルすべてに宿泊と同等に物流の機能を第一とする計画が見られる。その単一の開発思想が強かったことと、居留地内の法規制という点によって、建てられる建築に制限があり、居留地内のホテルのビルディングタイプは画一化が起こっていた。

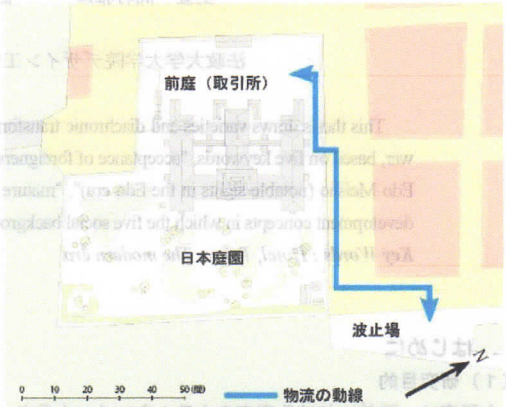

図１　築地ホテル館と周辺環境の関係

（４）築地精養軒ホテル

表２　築地精養軒ホテル館概要表

3. 築地精養軒ホテル				
改築	開業年	閉業年	所在地	周辺環境
前	1871年（明治6年）	1908年（明治41年） 取り壊し	京橋采女町30番地	築地居留地付近
後	1909年（明治42年） 新館建設	1923年（大正12）震災で焼失		
	客室数	建築概要	設計者	オーナー
前	12	木造洋風 平屋と2階建	不明	北村重威 （岩倉具視に仕え使節団から漏れた）
後	50	鉄骨造 3階建	ヤン・レツル	

築地ホテル館を除けば初めての日本人オーナーである、明治３年に北村重威が建てた築地精養軒ホテル[6]によって、ホテルが一部の日本人にも利用されることになる。北村は岩倉具視に仕えていた人間で、政府との結びつきも強かったため、西洋料理を作る店がなかった東京において、軍人や政府関係者、外国要人などに西洋料理をふるまう店として重宝されていた[7]。西洋料理の出前や、外国貴賓との交流がある日本人への西洋文化の指導など、ホテル本来の宿泊という機能ではなかったが、この活動によって東京に西洋文化が広まる後押しをしたと言っても過言ではない。

Hosei University Repository

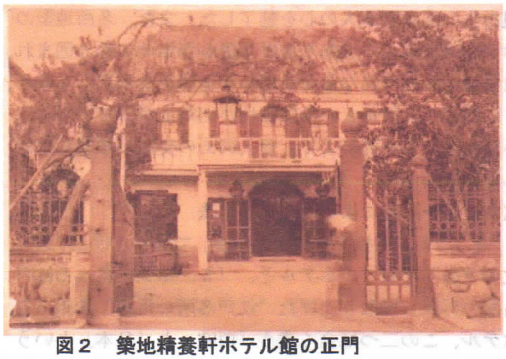

図２　築地精養軒ホテル館の正門

（５）ホテル建築における多様化の芽吹き

明治初期の東京において、ホテルとは未知の建築でその正体は外国人しか理解していなかった。その為、洋風建築全般を“ホテル”と勘違いする人もいたくらいで[8]、一般的な認識としては、外国人商人の為の宿泊施設でしかなかった。しかし、精養軒ホテルの成功によって、日本人がホテル経営に踏み込むキッカケが生まれ、ホテルが外国人の宿泊所以外にも活用できるという認識が芽生え始めたことで、今後の日本人オーナーのホテルに展開を見せる事になる。

４．ホテルが担う近代化の象徴

（１）鹿鳴館と官庁集中計画

明治初期の東京には、外国人の要人を受け入れる為の施設、所謂「迎賓館」が整っていなかった。迎賓館の計画を推進したのは当時の外務卿井上馨で、日本の欧化を推進し、欧米風の社交施設を建設して外国使節を接待し、日本が文明国であることをひろく諸外国に示す必要があると考え、迎賓館である「鹿鳴館」の建設に尽力していた[9]。更に井上馨が主導となり、東京の官庁集中計画が持ち上がる。ドイツの建築家ヘルマン・エンデとヴィルヘルム・ベックマンが都市計画及び主要建造物の設計を依頼され、彼の計画の中に外国人の接遇所を兼ねた国を代表する大型ホテルの設計が組み込まれ、ホテルは近代化の象徴として脚光を浴びる事になる[10]。

（２）帝国ホテル

表３　帝国ホテル館概要表

8. 帝国ホテル				
改築	開業年	閉業年	所在地	周辺環境
本館	1890年（明治23年）	1922年（大正11年）火災により焼失	麹町区有楽町（日比谷）	鹿鳴館の隣、橋詰
別館	1906年（明治39年）	1919年（大正8年）火災により焼失		
ライト館	1923年（大正12年）	1968年（昭和43年）解体		
	客室数	建築概要	設計者	オーナー
本館	60	木骨煉瓦造、3階＆倉庫・物見櫓の5層	渡辺譲	東京ホテル会社（渋沢栄一、岩崎弥之助、川田小一郎、大倉喜八郎、益田孝ほか）
別館	28	木造2階	大倉土木組	
ライト館	270	鉄筋コンクリートおよび煉瓦コンクリート造、地上3階（中央棟5階）、地下1階	F・L・ライト	

官庁集中計画に組み込まれていたホテルこそ、帝国ホテルの事で、明治政府からの多大なバックアップの下誕生した。経済的に余裕がなかった明治政府は渋沢栄一に協力を仰ぎ、渋沢の手によって東京ホテル会社が設立され、無事完成に至った[11]。

この頃海外で建築を学んだ若手建築家が帰国しだしており、設計はドイツで建築を学んだ渡辺譲が選ばれた。渡辺は、海外で学んだ知識を活かし様式の建物を建てるが、当時の海外市街地型ホテルの主流であった接道型ホテルではなく、日本の邸宅風の建物配置を選び建物内部には日本趣味の装飾を施すなどホテルを日本流にアレンジする努力を見せた。

図３　帝国ホテルのロビーと前庭

（３）東京ステーションホテル

表４　帝国ホテル館概要表

16. 東京ステーションホテル			
開業年	閉業年	所在地	土地概要
1915年（大正4年）	現存	東京駅	駅に付属
客室数	建築概要	設計者	オーナー
72	鉄骨煉瓦造 地上3階、地下1階 （うち2、3階の一部をホテルとして利用）	辰野金吾 葛西万司	所有：鉄道院 経営委託：精養軒

さらに時を隔てて大正期、名実ともにホテルが国家プロジェクトに取り込まれたのが大正４年に開業した東京ステーションホテルであった。東京の玄関口に巨大なホテルを取り込むこのプロジェクトには、建築家松井貴太郎の批判の様に、皇室第一という政府の大きな思惑が働いていた為、周辺環境とホテルの繋がりが断ち切れるなど批判的な事もあった[12]。しかし、このホテルの観光話題性によってホテルが市民に親しみやすくなったのも事実であり、この結果は今後の都市の在り方を見越した政府の策略であったのではないだろうか。

（４）ホテルが担う近代化の象徴

明治中期になると東京の国際化が求められ、政策の代表者であった井上馨によって諸外国に近代国家日本をアピールするべく、東京は官庁集中計画などが持ち上がり、明治政府の手によって次々と欧米化していった[13]。また、都市や建築だけでなく文化の欧米化が重要視され、国際交流の最たる場としてホテルに対する期待が大きくなったのもこの頃だ。ホテルが政府の政策に取り込まれた事により、少しずつ日本人の手で噛み砕かれていき、華やかでありながらも、大衆にとってもホテルが少しだけ理解出来るようになったのではないだろうか。

Hosei University Repository

5．ホテルによる江戸名所の再興

（1）外国人の観光と江戸風情の再認識

明治政府が近代化に励んでいた一方、東京に訪れていた外国人たちの中には、あまりに西洋に傾倒する日本人に危惧を感じる者も少なくなかった[14]。外国人が日本独自の文化、歴史を評価し、東京の江戸由来の名所地に観光して回ることで名所地にホテルが誕生する。それを指導したのも、井上馨で彼は東京を西欧化させつつも外国人の遊覧地である江戸風情の名所地にホテル建設を促す事で名所に洋風建築という新たな景観が生まれ、江戸名所の再興にも関わっていたのである。

（2）ホテル愛宕館

表５　ホテル愛宕館概要表

7. ホテル愛宕館			
開業年	閉業年	所在地	土地概要
1889年（明治22年）（塔は明治24年）	1923年（大正12年）震災で焼失	芝区愛宕	愛宕山山頂、西に塔あり
客室数	建築概要	設計者	オーナー
不明	木造洋風2階建	（ホテル：伊藤為吉）（塔：平野勇造）	小室貞次郎（横浜の鹿島屋オーナー）

横浜の老舗旅館である鹿島屋旅館が、明治20年に東京に進出し一時は東京一のホテルとまで言われるような成功を収める中、開業から1年経った明治21年に、内務省によって東京市区改正条例によって移動を命ぜられ官有地愛宕山の頂上でホテル愛宕館を開業させた[15]。移動先に愛宕山の山頂を指定するところを見ると、やはり政府も名所とホテルの関係性を重要な物と考えていたのだろう。

ホテル愛宕館のすぐ隣には、愛宕塔が建ち縦覧スポットとしても賑わった。ホテルと塔の設計はイタリア人技師の下で建築について学んだ二人の邦人建築家、伊藤為吉と平野勇造によって、素晴らしい意匠のホテルと塔が建てられた[16][17]。塔によって名所の要素が強まり、ホテルの魅力も強まるという相互関係と共に、ホテルと娯楽という強い結びつきが強調されるキッカケとなったのではないだろうか。

図４　ホテル愛宕館と愛宕塔

（3）ホテルによる江戸名所の再興

名所地型ホテルにおいて共通していえる事は、江戸風情の中に建てられた洋風の建物が、和洋折衷の新たな景観を生み出し日本人の心を魅了した。また、名所地型のホテルは東京の中でありながら豊かな木々に取り囲まれ、他のホテルとは異なる自然調和な空間を生み出しており、日本庭園とホテルという関係性が出来上がっていた為、外国貴賓にも評判がよく、要人同士の交流が頻繁に行われていた。

（4）同一思想による相反する手法

「4．ホテルが担う近代化の象徴」で取り上げた“近代化の象徴”としてのホテルと、「5．ホテルによる江戸名所の再興」で取り上げた“江戸名所の再興”を担ったホテル、この二つは全く違う「西欧」と「日本」という性質を持っていたように見える。しかし、面白い事に前者は国民に対しての西欧化「近代化の象徴」という面を、後者は外国人に対しての日本の再評価「江戸風情の再興」という、正反対の方法を採った、「日本の国際的アピール」という国策を基に発生したホテルという事がわかる。

6．市民生活の成熟と文化人の社交場

（1）市民生活と文化

明治が終わり大日本帝国として日本が成熟し、大正時代に入ると、明治時代から続く藩閥支配体制が揺らぎ政党勢力が進出し、尾崎行雄・犬養毅の指導相の下に大正デモクラシーが起こった。そういった時代背景のなか、市民たちの生活は豊かになり成熟され、これまで上流階級のみに存在していた文化も一般市民に普及し、市民の手によって新たな文化が生まれる等、多種多様なライフスタイルを選択できるようになり、それぞれのライフスタイルに合わせたホテルの開発が展開され、ホテルへの思想も幅が広がってきた。これまでの権威的なホテルではなく、利用者である市民本位のホテル開発がようやく始まろうとしている。

同時期の大森地区で誕生した二つのホテルからその多様性を解き明かす。

（2）望翠楼ホテル

表６　望翠楼ホテル概要表

13. 望翠楼ホテル			
開業年	閉業年	所在地	土地概要
大正元年	昭和11年（?）	大森区新井宿2-1500（現大森駅付近）	山王エリア 眼下に東京湾が一望できた
客室数	建築概要	設計者	オーナー
20	木造洋風2階建て プリジェンスの階段を移築	不明	若尾幾太郎

大正元年に出来た望翠楼ホテルのオーナーは、横浜で生糸問屋を営んでいた若尾財閥の若尾幾太郎という人物であった[18]。彼は震災で傾きかけた江ノ電に私財を投じて立て直し、更に代議士になるなど、社会の為に惜しみなく働く事が出来る人物で[19][20]、ホテル開発にもその思想が表れている。大正デモクラシーに伴い、文化

Hosei University Repository

活動が盛んになり「パンの会」等が結束されるようになると、多くの文化人はパンの会に触発されるように各々様々な活動をみせる。これからの社会を動かすのは文化だという考えを持って狭小でありながらも文人達が集まる事の出来るホテルを造った。

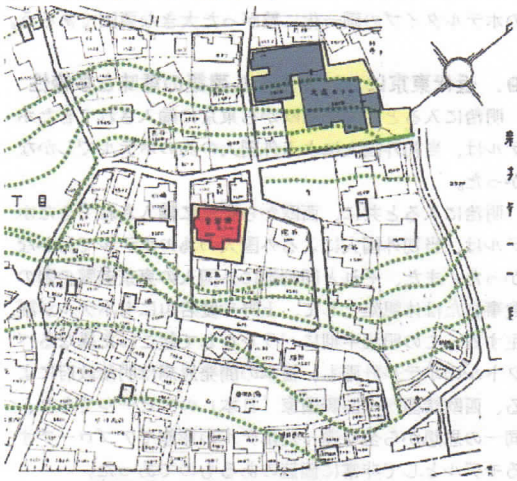

図５　望翠楼ホテル（赤）と大森ホテル（青）

（３）大森ホテル

表７　大森ホテル概要表

18. 大森ホテル			
開業年	閉業年	所在地	土地概要
大正10年		大森区新井宿2-1515（現大森駅付近）	山王エリア 眼下に東京湾が一望できた
客室数	建築概要	設計者	オーナー
35	木造洋風、本格的ホテル	不明	猪原貞雄

望翠楼ホテルのすぐ北にあり、猪原貞雄が経営する大森ホテルである[21]。望翠楼ホテルとは対照的に広い敷地を有しており、広告では本格ホテルとの煽り文や設備も充実していると謳っている。猪原は、日本の経済を活性化させ、国際社会で日本の地位を向上させるためにホテルを充実させるべきだと考え[22]、多くの外国人を誘致できるようなホテルとして大森ホテルを計画した。横浜と東京の中心地というビジネスとしても観光としても絶好なロケーションの大森で外国人が満足できるような設備の充実したホテルを造り、更に閑散期には日本人の客でにぎわうよう敷地内に神社を建てる等、国内外の客に目を向けた和洋折衷の本格ホテルであった。

図６　敷地内に鳥居が存在する大森ホテル

（４）市民生活の成熟と文化人の社交場

大正時代に入って市民のライフスタイルが確立し多様化した事により、オーナーの思想も多様化してきた。望翠楼ホテルのオーナー若尾幾太郎は、今後の日本を動かして行くのは市民の文化活動であると考え、一方で、大森ホテルのオーナー猪原貞雄は、国際社会の中での日本を強める為のツールとして、ホテルのポテンシャルを高く評価していた。この思想の多様化によって、同じ土地に全く異なるホテルが誕生したのだが、オーナーたちはホテルのポテンシャルを信じ、東京、いや日本の将来の期待を載せてホテルを建設したのである。このホテル開発を巡るエネルギーこそが大正の市民を顕著に表しているのではないだろうか。

７．技術革新による新様式ホテル

（１）関東大震災と技術革新

大正１２年９月１日に発生した、関東大震災によって東京は甚大な被害を受け、ホテル建築史も多大な影響を受ける事となった。以前と以後では出来上がるホテルが一変するのだが、その原因として、オーナー達が考えるホテルの思想が大きく変化した事、今後の震災に耐えるべく建築技術が飛躍的に進歩した事が挙げられる。ここでは、震災への復興による建築技術の革新が昭和以降のホテルに与えた影響を明らかにしつつ、これまでの東京には存在しなかった新様式のホテルの誕生に纏わるオーナーたちの思いを描く。

図７　震災直後に出来た丸ノ内ホテル

（２）万平ホテルの東京進出～麹町万平ホテル・八重洲ホテル～

表８　麹町万平ホテル概要表

29. 麹町万平ホテル			
開業年	閉業年	所在地	土地概要
昭和6年	昭和14年	平河町	首相官邸が完成したばかりで、高級住宅街にあった。屋上の庭園から国会議事堂を望む
客室数	建築概要	設計者	オーナー
82	元八千代生命本社ビルを改修	不明	佐藤太郎（万平ホテルオーナー佐藤万平の長男）

Hosei University Repository

表９　八洲ホテル概要表

31. 八洲(ヤシマ)ホテル			
開業年	閉業年	所在地	土地概要
昭和7年	昭和32年	日本橋区通一丁目6	近くに日本橋三越、高島屋があった。
客室数	建築概要	設計者	オーナー
65	コマーシャルホテルの草分け	久米権九郎	佐藤五郎（万平ホテルオーナー佐藤万平の三男）

昭和に入って日本を代表する軽井沢万平ホテルが東京に進出する事となる[23]。昭和６年に麹町の閑静な高級住宅街に誕生した麹町万平ホテルと、昭和７年の東京の商業・経済の中心地、日本橋に誕生した八洲ホテルである。

オーナーである佐藤萬平は、前者のホテルをハイクラス向けのホテルとして、後者のホテルを安価なコマーシャルホテルとして経営展開していくのだが[24]、この二つのホテルを比較してみると、どちらも狭小の土地に敷地いっぱい接道するように建物が建っているビル型ホテルとなっていて建築の特徴からでは区別がつかないような作りになっている。

図８　麹町万平ホテル（左）と八洲ホテル（右）

（３）技術革新による新様式ホテル

全く異なる土地で、異なる客層を相手とし、異なる開発思想を持っていたのに、似通った形態で成り立つことが出来たのも、震災以降の技術革新によって建築技術が向上したからだと言っても良い。

これら二つのホテルを区別するのは、周囲の環境、部屋の大きさという要素なのだ。今でこそ東京にありふれているが、震災を経験したばかりの東京市民にとって、瓦礫の中に堅牢に聳え立つビル型ホテルは、震災復興のシンボルであり、未来への希望の建物であった。

８．開発手法の単純化と東京拡大によるホテルの画一化

商用旅行者を対象とした短期滞在型のコマーシャルホテルは、東京の成熟によってその数を増やしていく。人口の増加により手狭になっていく土地にとって、昭和の技術革新によって建設が可能となったビル型のホテルは、狭い土地で多くの宿泊客を受け入れることが出来るというメリットがあり、明治以降の慢性的なホテル不足で悩む東京にとって、時代に順応した宿泊施設であったからだ。また、敷地の広さを無視しホテルの規模を自由に設定できるビルディングホテルは、ホテル内部でオーナーの開発理念を実現させることが出来たという事も、今後のホテルタイプの画一化に繋がった大きな要因であろう。

９．近代東京におけるホテル建築の意味と多様性

明治に入ると共に、西欧から東京に輸入されてきたホテルは、当初外国人による外国人の為のホテルでしかなかった。

明治に入ると共に、西欧から東京に輸入されてきたホテルは、当初外国人による外国人の為のホテルでしかなかった。また、それと同時期に外国人の東京遊覧の際の食事または休憩処として、上野や愛宕山にもホテルが誕生する。この明治中期にパラレルして起こった異なるベクトルのホテル計画も、根本の開発思想は明治政府による、西欧諸国への国際国家「日本」のアピールであり、同一の思想から全く違ったホテルの形態でアプローチするモデルとして非常に価値のあるものであった。

さて、ホテルに関しては蚊帳の外であった大衆だが、本当の意味で市民がホテルを獲得したのは、大正デモクラシー後の民主主義思想が強まったころである。東京市民がそれぞれのライフスタイルを確立していく中で、ホテルが市民の生活の中に入り込むようになったキッカケを作ったのが東京ステーションホテルである。ホテルを使う様になった東京市民たちは、自分たちのライフスタイルに合わせたホテルを開発する。都市型ホテルでもなくリゾートホテルでもない、その中間に位置する別荘型ホテルでは、同じ敷地でも思想が異なる事でホテルの形態は全く異なるという事例が見られることが出来た。

さらに昭和期にはいると、大幅な技術革新によってこれまではありえなかったようなビル型ホテルが誕生する。それは震災の影響で瓦礫の山となっていた東京において、新たな光景であり、希望の象徴だったのかもしれない。市民の経済状況に見合うような、様々なレベルのホテルが開発され、ホテルはより身近なものへと変化していく。

このように、明治から昭和初期までのホテルは。単に宿泊という目的だけでなく開発者の思惑や時代の必要性によって多様性に富んだ様式、形態、用途が見られた。東京においてのホテル史を読み解いた事で、ホテルは思想やその解釈によっていか様にも広がるポテンシャルを持っている事がわかった。それにも拘らず、昭和中期以降の画一化されたビル型ホテルを見ていると非常に嘆かわしい想いがこみ上げるのは私だけでは無い筈だ。ホテルにはその時代の国策や、開発者の思想、市民の理想などが具現化されており、建築というフィルターを通すことで、それらが顕著に浮き彫りになるのである。

Hosei University Repository

１０．謝辞

木熟ながら本論文を書き上げることが出来たのは、周囲の皆様のやさしさにより支えてもらったおかげで御座います。

指導教員の高村先生。ある時は楽しく、時には厳しくメリハリのある先生の姿勢には非常に影響を受けました、至らない私を最後まで面倒見て頂き本当にありがとうございました。副査を担当してくださいました、陣内先生、渡辺先生。お二方が私の論文に欠けていた所を指摘して頂いたおかげで、最終ブラッシュアップすることが出来た事に感謝しています。建築学科の教授、助教授、講師の皆様。建築に対して幅広い知識を得ることが出来たのも、先生方の授業があってこその事です。ありがとうございました。高村研究室の皆様、先生よりも近い立場で論文に対する悩みを聞いていただいた事は忘れません。本当にありがとうございました。

参考文献

1)勝木祐仁,篠野志郎:大正・昭和初期におけるホテルの概念の展開ー都市施設としてみた日本のホテルの史的研究ー,1999
2)同上
3)運輸省:日本ホテル略史,運輸省,1946
4)東京都:都史紀要(四)築地居留地,東京都,1957
5)大鹿武:幕末・明治のホテルと旅券,築地書館株式会社,1987
6)運輸省:日本ホテル略史,運輸省,1946
7)木村吾郎:日本のホテル業 100 年史,明石書店,2006
8)富田昭次:ホテルと日本近代,青弓社,2003
9)藤森照信:明治の東京計画,岩波書店,1982
10)同上
11)帝国ホテル:帝国ホテル百年史,帝国ホテル,1990
12)長谷川堯:日本ホテル館物語,プレジデント社,1994
13)藤森照信:明治の東京計画,岩波書店,1982
14)富田昭次:ホテルと日本近代,青弓社,2003
15)運輸省:日本ホテル略史,運輸省,1946
16)村松貞次郎:やわらかいものへの視点,岩波書店,1994
17)山口勝治:三井物産技師平野勇造小伝―明治の実業家たちの肖像とともに,西田書店,2011
18)運輸省:日本ホテル略史,運輸省,1946
19)湘南倶楽部:江ノ電百年物語,JTB,2002
20)横浜市／編:横浜市史Ⅱ,横浜市,1993-2003
21)運輸省:日本ホテル略史,運輸省,1946
22)猪原貞雄:観光外客招致策私見（一～九),京城日報,1916.9.18-1916.9.27
23)運輸省:日本ホテル略史,運輸省,1946
24)東京市役所:東京市商工名鑑,東京市商工名鑑發行所,1934

図版出典

図 1) 参謀本部陸軍部測量局『五千分一東京図測量原図』一般財団法人日本地図センターより作図
図 2) 石黒敬章『明治・大正・昭和 東京写真大集成』新潮社、2001 より
図 3) 帝国ホテル『帝国ホテル百年史』帝国ホテル、1990 より
図 4) 石黒敬章『明治・大正・昭和 東京写真大集成』新潮社、2001 より
図 5) 『火災保険特殊地図　大森区　戦前分』都市整図社、1934 より作図
図 6) ＮＰＯ法人馬込文士村継承会ＨＰ〈http://www.magomebunshi.com/index.html〉より
図 7) 木村吾郎『日本のホテル業 100 年史』明石書店、2006 より
図 8)同上